

農山村における空間計画ワークショップに期待される効果とその構造化に関する研究  
ー長野県千曲市姨捨地区を対象としてー

○矢野 加奈子(東京農業大学大学院造園学専攻)  
麻生 恵 (東京農業大学地域環境科学部)

## 1. 研究の背景と目的

近年、住民の地域環境や景観などに対する関心が高まり、景観に対する住民の意識が多様化してきた。そのため、地域づくりの主体が行政から地域住民へと移行してきた。こうした流れをうけて、様々な事業においても地域住民が計画に参加し、積極的に意見を発言することが出来るワークショップ(以下WSとする)形式の会議が多くの自治体で採用されるようになった。これらWS形式の会議でまちづくり、農山村づくりを行うことにより地域住民が地域の魅力を認識する、より地域に愛着を持ってもらえる、活動の継続性につながるなど様々な効果を期待することができる。また、多くの人にその地域のことを真剣に考えてもらい、主体的に地域に関わる場を提供することで積極的に地域に関わる意識をもった住民の育成をはかることができる。そのため、このようなWSを開催することが地域の活性化につながるのではないかと期待されている。

今まで農山村では、生産性や経済性を重視した価値観を持つ人が多かったが、近年では地域住民の価値観が多様化している。そのため、農山村で行われるワークショップでも住民が自主性を育み、地域について考え、共に学ぶ場となることが求められるのではないかと考えられる。しかし、現在、農山村における空間計画WSでは実施主体が自治体などの行政が主であり、行政が定めた目標に向かい進行することが多い。また、実施主体、参加者共にWS自体への理解が十分ではないため多数意見が場を支配してしまったり、地元住民からは意見を聞く、または合意形成を得るだけで会議が終了してしまったりする。これではWS本来の効果を発揮せず、多くの地域住民に主体的に地域に接してもらう意識を育むことは難しいのではないかと考えられる。

また、農山村型の空間計画WSでは住民の生活や農業生産活動と密接に関わっているため、都市地域の計画などとは異なった特性を持っていると考えられる。そのため、農山村で行われる空間計画WSではその特性を十分に理解し、住民の自主性を育み、地域について考え、学ぶ場とすることが重要になってくる。また、農山村型のWSにどのような効果が期待されているかを知ることでよりよいWSが行われるのではないかと考えられる。

そこで本研究では農山村における空間計画WSの先進的事例である長野県にある姨捨(田毎の月)棚田で行われたビオトープ(生き物の生息環境)づくりWSを対象とし、まず農山村における空間計画WSの特性を整理、把握する。次に、特性から考察される農山村型のWSを行うことで期待される効果を体系的に構造化し今後の農山村型WSの効果的な運用に寄与することを目的とする。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象

本研究では、農山村における空間計画WSの先進的事例である長野県千曲市にある姨捨

(田毎の月)棚田で行なわれている「田園自然環境保全整備事業 姨捨地区」(以下姨捨ビオトープ事業と称す)を対象とする。

姨捨棚田は冠着山の山麓にあり、「長楽寺境内地区」「四十八枚田地区」、「姪石地区」の計三ヶ所約 3ha が 1999 (平成 11) 年 5 月 10 日に国の名勝(姨捨「田毎の月」)に選定されている美しい田園景観が保全されている場所である。

しかし近年、耕作者の高齢化などにより農地の荒廃化が見受けられる。そこで、棚田景観の保全や農村づくりを目的として姨捨棚田ビオトープ事業における WS が、平成 16 年から行なわれている。

ビオトープづくりでは、特に管理・運営が重要視される。そこで、その体制作りを目指して調査、計画、施工、管理・運営の一連の作業に住民が参加する WS 型の会議が初めて導入された。対象地は姨捨棚田の「長楽寺境内地区」、「姪石地区」に隣接する敷地約 1ha の場所で、文化的景観にあわせたビオトープづくりを目的としている。WS には地域住民やその地域の農業従事者、関心のある市民など様々な属性の人々が毎回 40 名ほど参加した。また、参加者を一班から四班に分け各班に本学の学生とコンサルタント、行政関係者が加わり計画を検討・作成した。

現在は土地の改修工事が終了し、管理・運営に向けて管理団体が設立された。

## (2) 研究方法

I ワークショップ全体の特性を把握するために次のような方法で理解を図る。

i 過去 7 年分の都市計画学会・農村計画学会・造園学会で取り上げられた空間計画 WS に関する事例の文献調査を行い、事例を主体、期間、方法などの項目で分類を行い解析する。

ii i の結果をもとに空間 WS の全体的な特性をつかむ。

iii 特に農山村の事例に着目し、デザインレベル、住民の関与レベル、計画段階で整理し表を作成する。

iv iii をもとに農山村型 WS の特性の全体像を把握する。

II 農村型の WS の具体例として姨捨ビオトープ事業で特性の分析を行う。これらの調査はすべて参加・観察型で行った。また、WS 参加後も継続して地域活動などに参加し、参加者、地域住民、コンサル、行政にヒアリングし 3 年間観察を続け現在も継続中である。具体的な方法は下記に示した通りを行う。

i 姨捨ビオトープ事業の概要を把握する

ii 姨捨ビオトープ事業の WS 内で意見がどのような属性の人から発言され、どのように合意形成されたかを図にしたものを参考に発言者の属性や意見の属性を分類する。

iii ii をもとに姨捨ビオトープ事業における農山村型 WS の特性を把握する。

III II で得られた結果を元に農山村型 WS の特性を把握し、農山村型の WS にどのような効果が期待できるか考察する。

IV II・III の結果より WS を行うことで期待できる効果を体系的に構造化し、仮説を設定する。その後、姨捨ビオトープ事業を対象に検証を行う。また比較対照研究として同じく参加・観察型の調査を行った他地域の景観整備 WS でも検証を行う。

これらの結果を重ね合わせ、現在の農山村における空間計画 WS の特性を把握し、今後の

農山村型 WS に期待される効果の体系的な構造化を行う。

### 3. 現在の研究成果および考察

現在までに姨捨ビオトープ事業で行われた WS で調査した内容を検討し姨捨ビオトープ事業での農山村型 WS における特性が明らかとなってきた。

姨捨の WS には農業従事者、市民、地域住民、学生、行政、コンサルタントで班が構成され話し合いが行われた。上記参加者の割合は農業従事者が 16%、地域住民が 24%、市民が 33%、学生、行政、コンサルタントがいずれも 9% であった。班の構成人数は少ない班で 9 名、多い班は 13 名で行われた。回毎に多少の入れ替わりや変更はあったが影響を及ぼすほどではなかった。班内の参加者の属性割合はまちまちで班の特徴や意見形成に影響を与えている。

姨捨での WS 全体を通しての特徴として景観に関する意見が多かったことがいえる。これは第一回 WS、第二回 WS を通していえることである。景観に関する意見が多かった理由としては、姨捨(田毎の月)棚田が国の名勝に選定されており、現在まで様々な保全事業や活動などが行われているため住民の景観に対する意識が高かったこと、景観に配慮した計画ということが目標として説明されていたことなどがあげられる。景観に関する意見はどの属性の参加者からも聞かれた。

また、管理に関する意見も全班に共通して多く聞かれた。この理由としてはビオトープづくり計画の大きな軸である継続した活動を自分達で行うという意識が高かったことなどがあげられる。第一回 WS で参加者の意見を取り入れたラフプランが作成されていたため第二回 WS では管理に関する具体的な議論となった。第一回、第二回とも管理に関しては特に農業従事者や地域住民から発言される傾向があった。

生態的側面に関する意見はビオトープづくりの計画にしては少なく、発言者も特定の人であることが多かった。これはビオトープへの理解や知識のレベルが参加者間で異なったこと、生態的な側面に関しては専門的な知識が必要なのではないかと参加者に考えられたことなどがあげられる。

また、専門家の意見に影響を受けることが多かった。

農業の生産に関する意見は特に農業従事者から発言されたが、専門的な意見であったため班内で意見が分かれることはなくほぼ計画にも採用された。

これらの研究結果により次のようなことが明らかとなった。姨捨ビオトープ事業における WS では国の名勝に選定されるなど景観保全の考えが浸透していたため、住民の意識が高くそれが意見に反映された。このように政策や事業、歴史が住民の意識を形成し、意見に影響を与えていると思われる。そのため、WS を行う際、今までどのような事業が行われてきたかなど、その土地の歴史を把握しておくことが重要となってくる。

また、農業従事者からは生産や管理など、生産的、現実的な意見が多く、一般の住民からは生態的側面や観光など幅広い意見が実行可能、不可能に関わらず出ることがわかった。また、これらの意見は班を構成する属性や割合により影響を受けることもわかった。そのため、参加者の属性を把握し班構成を考えることが必要となってくるのではないかと思う。

その他に、今回の WS の実施主体である行政にとっては、担当者がメンバーとして WS に参加していたため、班内で出た意見の意図を理解し、多数意見と少数意見を同等に扱った

ことが参加者から多様な意見を引き出した一因ではないかと考えられる。そこで、WS 終了後に行政の担当者が変わるなどして参加者の意図が継承されないなどの問題がないように、WS の振り返り作業を参加者と共に行うなどの仕組みづくりを考えていく必要があると思われる。

このように農山村の WS ではその土地の持つ特性、構成要因、歴史、住民の意識などを十分に踏まえ計画を立てることが必要となってくる。

また、参加者の属性が意見に大きな影響を与えることを十分に理解し、その WS の目標に一番合った班構成やプログラムを組むことが必要となってくる。

その際、多くの農山村型の WS では計画図などの成果を出す事が期待されているため、WS の目標をはっきりと提示し、それにあった一定の成果を出すことが求められる。

しかし、WS の目標を明確にしても目標に対して参加者の理解度や知識に差が出る場合は、参加者全員からある程度一定の理解が得られるように資料を作成したり勉強会を開いたりするなどの工夫をする必要がある。

また、農山村型の WS では WS そのものに対する理解度にも違いが見られるため、WS の根本的意義である「共に創り考える」「当事者意識を持つ」という考えが浸透しにくいこともわかった。そのため、ただ意見を聞くだけの WS になりがちになり十分な意識の芽生えまで進まず、その後の活動の継続も困難になることが考えられる。

以上のような点に留意することで効果的な WS を行うことが出来るのではないかと考えられる。

#### 4. 仮説の設定

一般の WS、農山村型の WS の特性を把握するうちにそれぞれの主体がどのような効果を期待して WS に望んでいるかが明らかとなってきた。その結果を目的、主体別に分類し図にした。また、これらの効果は相互に関わっているものもあると考えられるため、それらの表を基に期待される効果を相互作用に考慮し仮説の図を作成した(図 1)。

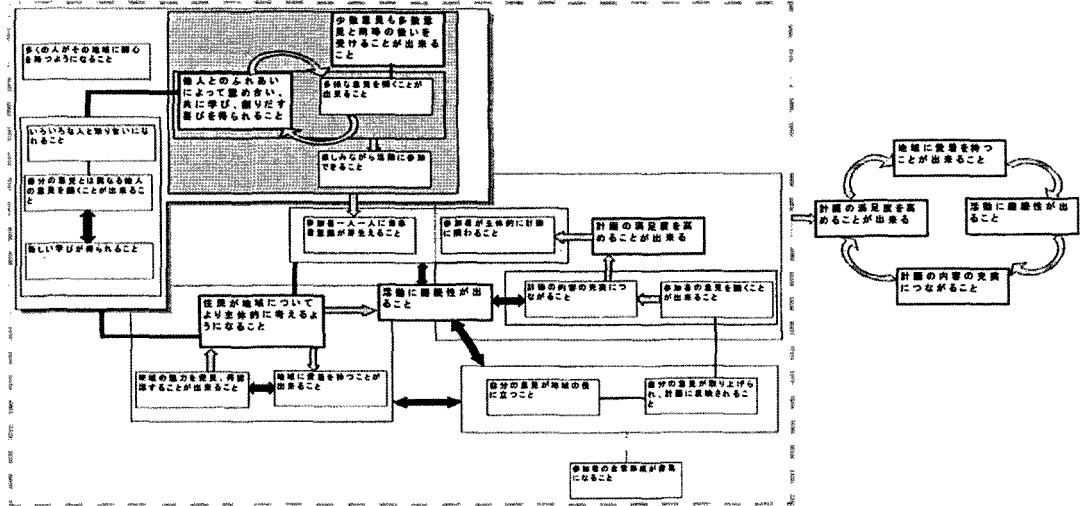


図 1 農山村型 WS に期待される効果